

## 巻頭エッセイ

## 救貧法とニュー・ラナーク

朝倉 美江(金城学院大学現代文化学部教授・研究センター理事)

「キャラコのお古着を着せられると、オリバーははっきり烙印をおされ、たちまちにして救貧院の孤児となった」「いやしい、いつも空腹をかかえている苦役者 どこへ行っても打たれ蹴られ みんなから蔑まれ、誰からも不憫をかけてもらえないへと落ちてしまったのである」(チャールズ・ディケンズ『オリバー・ツイスト』)。この「烙印=スティグマ(stigma)」という言葉



葉は大学の社会福祉の講義で必ず説明される。それは、社会福祉が発展しないのは背景に福祉への偏見や差別があるからだということを学生に理解させるためである。そのような「烙印」は改正救貧法(1834)にも引き継がれた。その救済は「支払い労働、貯金、慈善、家族や友人(の援助)など他の方策が尽きた時に、最低限のセーフティネットを提

供する」というものであった。

救貧法は16世紀から20世紀前半の歴史の産物である。改正救貧法当時のロンドンでは人口の3割が「貧困ないし欠乏状態」であり、その原因は低賃金と不規則な労働であることをチャールズ・ブースが明らかにしている。そして20世紀半ば以降、英国などの欧州諸国、そして日本は国家責任による権利としての福祉政策をめざしたはずであった。

現在私たちの国は、貧困率が16%、60人に1人が生活保護を受給し、非正規雇用が35%となり、貧困・不安定就労が拡大し、さらに人口減少、超高齢社会のなかで福祉・医療・介護が必要不可欠となっている。にもかかわらず現政権の「社会保障制度改革国民会議」では「自助・自立」を社会保障の基本的な仕組みにする“自己責任”原則や、国の公的責任と財政負担を縮小する方向が明確に示され、過去の歴史の産物であったはずの救貧法に限りなく近づきつつある。

さらに憲法改正が議論され、そこでは社会保障のあり方を根底から変える「家族に関する基本原則」が新設され、家族の助け合いは義務とされている。家族が助け合うことは誰もが望むし、私もそうありたいと願っている。しかし貧困はブースが明らかにしたように個人の問題ではなく社会問題であり、働きたくても働けない失業者、健康を願っても病気や障害によって自立できない人たちが存在し、それは私たちがお互いに支え合っていくべき問題であり、家族に責任を負わせる問題ではない。そもそも、誰もが人間らしい(健康で文化的な最低限の)生活を営む権利は、憲法25条で認められている。

救貧法の時代の英国では、児童労働はごく普通のことだった。子どもたちは、紡績工場で1日14、5時間、時には16時間も働かされた。その状況を改善しようと、ロバート・オウエン(1771-1851)は9歳未満の労働禁止、16歳未満の12時間以上労働と夜勤を禁止した工場法(1819年)の成立に大きく貢献した。そのオウエンが「ユートピア社会主義」を実現しようとしたのがニュー・ラナーク(New Lanark)である。

この3月、私はそのニュー・ラナークを訪ねた。それは1785年にクラウド川に沿った紡績工場と労働者住宅から造られたコミュニティで、当時約2500人の労働者が働いていた。多くが救貧院出身者だった労働者のコミュニティを、オウエンは労働者が相互に協力し、協同の関係にたつ社会に変革しようとした。そこでは事業で得た利益を労働者の就労・生活環境の改善に使い、安全で安価な商品の店舗、無料の医療、幼児や成人の学校などが創設された。オウエンが描いた協同社会の精神を私たちも引き継ぎ、創造したいと思う。



## 第9回東海交流フォーラムを開催しました！ 「協同がよりよい社会を築きます！」

～協同の目的を深め合い よりよい社会とくらしづくりを目指した 実践を学ぶ～

2月23日（土）第9回東海交流フォーラムを名古屋駅前のウインクあいち5階小ホール1に於いて、105人の参加で開催しました。参加者からは「多くを学んだ」との喜びの声を多数いただきました。まず高橋正さんから今直面する現実をテーマに問題提起いただき、市民の協同組織や協同組合が実践している事例を8事例報告いただきました。

**問題提起 “日本が今直面する現実” ～全般的な生活の危機、生命の危機にある今の社会～**

地域と協同の研究センター顧問 高橋 正 さん

「私は来月で81歳になります。私の生涯から考えますと、日本という国はこんなに無様な社会になるとは思ってもいませんでした。戦争中は厳しかったわけですが、それなりに戦中の思想で支えられ、国民一億一心で過ごして来ました。戦後は新しい国をつくるということで、親たちは必死にがんばりました。素晴らしい戦後復興ができました。それがこうも無惨に崩壊するとは思ってもみなかったことです。今後どう立て直すかが、大きな課題です。いろいろな面でセーフティネットがこわれていますが、取り分けて経済社会構造が劣化しています。メルトダウンを起こすのではないかと思います。バブル経済がはじけて、長い平成不況が続き、その過程で私たちの社会が戦後築いてきた素晴らしいセーフティネットがどんどん取り壊され、ほころびてきました。それが非常に長く、バブル不況がそろそろ終わるかなと思っていたら、2008年9月のリーマンショックで世界恐慌に入りました。そのまま、日本経済は今日に至っています。その間に大きな構造変化が起き、人口減少が世界のよその国が経験したことのないようスピードで起きています。日本は少子と高齢化が同時に進行しまして、国立社会保障・人口問題研究所が予測していますが、それによると2050年には65歳以上の人口が35.7%になり、人口が1億人になります。2100年には6400万くらいになります。たいへんな人口減です。」こうした社会の変化の中で、文化・精神面の変化、社会の急速な衰退、弱まった社会的セーフティネット、全般的な生活不安社会の到来、「平等社会」から「格差社会」へ、無縁社会への道といった内容のお話をいただき、安心・安全な社会を市民自ら築き守る道として協同の力で新たなセーフティネットをと問題提起いただきました。



**実践交流 「地域でのよりよい社会とくらしづくりを目指した協同の実践」**

高橋 正さんの問題提起に応え、下記の8事例の報告がありました。

- 報告 大学生の食と健康を支える大学生協の取り組み  
報告者：山本昌也さん（全国大学生協連東海ブロック事務局次長）
- 報告 ささえあい たすけあい 地域だんらん まちづくり ～南医療生協の取り組み～  
報告者：伊藤他美子さん（南医療生協非常勤常務理事）
- 報告 配送センターと福祉グループとの連携で取り組んでいること  
報告者：小河原昌二さん（コープあいち名東センター センター長）
- 報告 コープみえの高齢者利用支援の取り組みのその後  
報告者：宮部博充さん（コープみえ大安センター センター長）
- 報告 コープぎふのおしゃべりパーティーでつくっている場づくりの取り組み  
報告者：武野典子さん（コープぎふ理事）服部ゆかりさん（コープぎふ理事）
- 報告 南医療生協子育て支援のとりくみ 「ママクルフェスティバル」「赤ちゃん同窓会」  
報告者：福田翔子さん（南医療生協赤ちゃん同窓会実行委員長）  
安井洋子さん（南医療生協非常勤常務理事）
- 報告 地域でのくらしを支え続ける池内福祉会の取り組み  
報告者：丹下由紀子さん（社会福祉法人池内福祉会理事長）
- 報告 奥三河地域で農協が取り組む地域支え合い事業の取り組み  
報告者：柴山好浩さん（JA愛知東 企画課）

詳しい報告の冊子を発行する  
予定です。作成しましたら会員  
の皆様にはお届けします。  
（文責：事務局 大島）

# 「近藤園芸」見学調査会《食と農パネル世話人会主催》開催 継続できる地域農業のあり方を学び考えあう！

「毎年毎年、ピーマン一筋、親子で2代での工夫と努力に感動！！」 文責/事務局

2013年1月25日(金)に稲沢市の「近藤園芸」見学調査会としてパネル世話人8名で行きました。継続できる農業についてのお話を伺いしようと見学をしました。近藤さんと息子さんより、ピーマンの施設園芸の概要、作物の特徴や日頃どう努力されているかなどの現状と課題でお話をお聞きしました。濃い緑色で、苦味少なく甘味のあるピーマンでした。



## 《近藤園芸の近藤さん親子のお話の概要》

4つのハウスがあり、収穫を5箇所ですらして、収穫は2月以降週5回のサイクルでやり、平日は毎日収穫しています。ミツバチの交配で、てんとう虫やアブラムシの天敵昆虫を使っているのが特徴です。目による選別、機械の袋詰めが当日出荷、購入し易い価格面から、生協との話し合いで1袋130グラムにしています。土壌診断をして、米かすなどの有機肥料を使い土壌作りに努力しています。

夏秋ピーマンをやって43回目です。袋詰めは自分で処理するのは大変でしたので、試行錯誤して袋詰め機械の原型を作りました。夏はつらい。初期は周年栽培でしたが、ばててしまうので今は夏場はつくっていません。1日1万パック出す時は朝7時から午後3時半くらいまで収穫、そこから詰めるのに3時間かかります。作業終了は6時か7時です。父母、僕とパートさん5人で、計

8人で収穫し、去年の実績は123トンです。出荷量がスイングするのが最大の問題です。一番多い時に注文してくれると良いが、ないときに注文が多いと困ります。価格が一定ではなく50円の時もあり、150円の時もあります。利益が少ないので、農業者が減っています。もっと上がればどんどんやる人が出ると思います。安い方がいいと言われても、原価を切ればお手上げです。

息子さんより・・・「継ぐ覚悟をした」のは

4ヶ月茨城で研修、オランダへも勉強に行きました。毎年毎年どうやったら収入が出来るか、考えていかないといけません。生産者が考えて、質を高めて、量を多くしていく。うちは水稲も撤退です。何もかもやると大変です。ハウスも35年くらいさびさび・ぼろぼろになるまで使いこんでいます。父がこういう性格で楽しんでやっているので、同じことをやっていけたらいいと思いました。親父からは「ピーマンやれ」とは一言も言われていません。子供にもそうは言うつもりはありません。将来そう言ってくれたら、僕のやっていることが良かったという指標になります。収穫が土日はないので、休みを取れるようになってよかったと思います。

## 《参加者のレポート》 より

ピーマンが提供されるための努力におどろきました。土壌作りでは残渣の発酵に微生物を活用というお話には、はじめてうかがう事ですごいと思いました。

美味しさ、栄養面でも収穫したものを当日出荷されて新鮮！！長期利用も可能。とてもつややかで緑色が濃くおもわずかぶりつきたい！！なんて・・・(笑)。

施設園芸は、大きなコストがかかるが、規模の拡大(日本の施設園芸の規模平均は20aだが、68.5aで)やコスト削減などでの経営努力があり、農作物を特化して近代的な技術を見据えての活用、人並みな労働時間の確保などで再生産価格を生産者自らの工夫や努力が行われている様子が分かり、大変良かった。

親子二代でピーマン一筋にがんばっておられることに感動した。お父さんに「継いでくれ」と言われたことはないけれども、後ろ姿を見ていていつの間にか決めていたようです。小さな息子さんにも「言うつもりはない」という若いお父さんの言葉をとてもうれしく聞きました。

「再生産可能な農業」と言うとき、消費者は何をすればいいのかと常に思う。まずは、現地で見たこと、思ったことを他の人に伝えることだと思う。



## 私のくらしの中の生協商品3

### ～ 第8回生協職員の仕事を語る会～

2013年3月10日（日）、ワークライフプラザれある大会議室に於いて、研究フォーラム職員の仕事を考える世話人会主催で、第8回生協職員の仕事を語る会「私のくらしの中の生協商品3」を開催しました。今回のゲストスピーカーは、コープあいち2人、コープぎふ1人、コープみえ1人で計4人の組合員さんに参加いただき、いろいろお話しいただきました。その一部をご紹介します。

**インタビュアー：コープあいち組合員 中村 依子さん**

**ゲスト：コープぎふ 松葉 抄恵子さん**

コープあいち 江島 恵子さん

コープあいち 大木 沙予さん

コープみえ 稲垣 悦子さん



中村さん

**中村（インタビュアー）：**稲垣さんは、ステーションでお話ができるとプロフィールに書いてくれています。前回の語る会でお聞きしたコープみえの組合員さんがステーションを利用されていて、どなたとも話せないと言われていました。稲垣さんがステーションで話ができるということですが？



稲垣さん

**稲垣（ゲスト）：**商品を受け取りに行く時間帯はバラバラで、行ける時間で行くと、職員さんがみえて、すごくいい方で、お友達みたいに声をかけてくれるんです。「どんな商品がいいの・・・？」と挨拶もするし、いろんな情報を教えてもらえます。若い方から年配の方までみえます。一応行く時間帯は決まっています。その時間帯に行くと、いろんな方がみえます。去年は、30年ぶりに同級生に会って、感動しました。やっけてよかったと思いました。それがきっかけでプチ同窓会もしました。

**中村（インタビュアー）：**松葉さんはずっと共同購入ですか？班のみなさんはずっと変わりなく同じ方がやってみえますか？

**松葉（ゲスト）：**最初は5人いましたが、働きに出られて、今は3人です。一人は休みがちで利用されていて、一人はお年寄りの方です。私は大きなもの、お米、水とか持ってきてもらって、買い物に行かなくていいから続けています。前は商品を仕分けしていましたが、今はパックされていて、つながりが少なくなって寂しいですね。マンションに住んでいるんですが、上も下も誰が住んでいるのって感じです。最初に声をかけてくださった方から「やらない?!」と言ってくださって・・・。誘われた時はうれしかったです。生協を「やる?」と聞かれて、すぐに「はい」と答えていました。生協の「せ」の字も知らなかったのですが。車を運転しませんので「楽だよ」と言われて考えもなく入りました。



松葉さん

**中村（インタビュアー）：**今回で「私のくらしの中の生協商品」は3回目ですが、これまでは「ちょっとしたことは言わない」という組合員さんが多かったんです。「これくらいのことはいいか」と思って言わないんですということでした。それでその後どうしますかと聞いたら「買うのをやめます」ということでした。言わないで気に入ったものが来なければ、次から買うのを控えてしまいますよね。そうすると生協は何もわからないうちに買ってもらえなくなるわけですよね。声を出していただいているならありがたいと思います。松葉さんはいかがですか？

**松葉(ゲスト)**：私はあまり言わないですね。私はイチゴが好きなので、よく買いますが、やはりいい時と悪い時があります。お弁当に入れますので、当たっていたりすると心配になります。いい時はいいんですが、品種にもよるかなと自分で思って言わないですね。ナスも切ったら黒かったりして、でもいいかと。私は次の時も利用しますので、でも担当には言えなくて、何かの機会に支所長にあった時に「悪かったわよ」と言ったりしています。電話というものは私は苦手なので、どうしてもそうなりますね。

**中村(インタビュアー)**：届いたらその日に全部使うわけではないので、使う時に気がつくんですね。前の「私のくらしの中の生協商品」では、食品はまだ言うけど、雑貨は連絡しないということでした。雑貨はみなさん利用していますか？思っていた商品と違うということはないですか？

**稲垣(ゲスト)**：利用しています。思ったのと違うということはないですね。服を利用したことがあります、破れていることがありましたが、すぐに対応してくれました。ステーションを利用していますが、職員さんがすぐ連絡してくれ、「こうするといいよ」とか教えてもらって助かっています。

**中村(インタビュアー)**：子どもさんが一旦家を出て、帰ってきたり、くらしが少しずつ変わっていますよね。自分が利用する商品は変わってきていますか？

**江島(ゲスト)**：食品に関しては、娘も息子も年齢が上がって、食べ盛りは過ぎましたので、息子も丼飯は食べなくなって、以前唐揚げでも小袋サイズは割高なので大きなサイズをって言っていました、仕事し始めた外食もあり、大きなサイズよりも、おいしいものをちょっと買いたいと自分になってきました。娘も20歳になったら、少食になり、ちょっとしか食べなくなりました。大袋の手羽元を買っても、4人でも余ってしまうようになりました。より小さいもので、チャックシールで、ばら凍結の豚肉とかミンチは使うようになりました。いっぺんで使ってしまうなければならぬものは減ってきました。バラエティーに富んでいます。

**中村(インタビュアー)**：大木さんは、生の野菜だと子どもさんも小さいので使いきれないということもあるのでしょうか？ちょっとずつ使うには冷凍は便利ですね。



大木さん

**大木(ゲスト)**：金曜日が配達日で、配達では愛菜ボックスが届くので、あとちょっとあればという時に冷凍野菜は便利です。青菜類は特によく使っています。愛菜ボックスは、娘も楽しみにしていて、野菜を出しながら、これ何と話しをしています。1週間で使いきって、少し足りないくらいです。

注1)愛菜ボックスは、コープあいちが企画している、地元愛知を中心にした産消提携産地から旬の野菜、果実をセットでお届けする予約登録の商品です。

**中村(インタビュアー)**：生活も変わっていきますよね。今お弁当をつくっていても、5年10年先、ずっとつくるかといえば、そうでもないですね。この先、自分はどんなものを利用しそうだというものはありますか？

**江島(ゲスト)**：利用しそうな商品は宅配弁当です。今一つ難点は、両親は、糖尿病がひどくて、腎臓も悪いので、そういうことに対応した弁当があるといいですね。それで生協が利用できずにいます。利用できる、選べる弁当があるといいですね。私が必要になったら、迷わず使えるかなと思います。お弁当を利用したい世代は高齢ですね。健康で元気な人は、お弁当を利用しないですね。そういう糖尿病とか、高血圧とか対応が必須ではないでしょうか。父は歯もないので、咀嚼ができません。今は一度ミキサーにかけて、それを成形し直したお弁当を食べています。そうしたら栄養の吸収率が上がりました。以前はすごく食べていて、体がしっかりしたおじいちゃんでしたが、栄養失調と言われて、その一端ミキサーにかけてもう一度成形して、お肉とか野菜の形になっているんですが、その弁当にしたら、吸収率が上がって血液検査のデータがよくなりました。それはいい機械を使っているのでも単価も高いのですが……。そのお弁当を利用しています。



江島さん

詳しい報告の冊子を発行する予定です。ご希望の方は事務局までご一報ください。

《三重地域懇談会「三重のつどい」》開催

文責/事務局

# 『せいわの里・まめや』取り組みに学ぶ

—楽しく農村料理パイキングで昼食、地域振興のお話を聞きました—

2013年1月15日(火)に三重県多気郡多気町の農業法人「せいわの里・まめや」と近くの多気町波多瀬の元丈の里「ゆめ工房」へ総勢24名ほどで行きました。地域での地域振興の取り組みを楽しく学ぶ一日となりました。今回「せいわの里まめや」の北川さんのお話を主にご報告します。



== 訪問の内容 ==

「せいわの里・まめや」にて

・おいしい農村料理パイキングで楽しい昼食。

「せいわの里・まめや」代表・北川静子さんより

・地域振興の取り組みのお話

「水土里ネット立梅用水型小水力発電プロジェクト」

元丈の里「ゆめ工房」でのお話より

・世界初の立梅用水型小水力発電機「彦電」実験、来年度から本格的な運用を計画。獣害電気柵や電気自動車用充電や6次産業施設への応用を考えている。

・地域住民とともに考え、地域の財産として小水力発電を利用することで、産・官・学・民の共同プロジェクトとして地域を見直し、人と自然がつながる町を目指す地域活性化を進めている。

## せいわの里・まめや 代表 北川静子さんのお話 概要

地元の家庭料理を地元の主婦たちが、パイキングでおなかいっぱい食べていただけるようにつくっています。揚げたてのお揚げやドーナツや野菜料理などです。体験工房には豆腐とお菓子、味噌と漬け物の加工所が4つあり、みそづくり、おからづくり、料理を体験できます。

### ○少量多品目で庭先の野菜を使って○

農家のおばあさんが庭先で作った少量多品目の野菜を材料にして、いろんな料理ができます。地産地消で、いろんな野菜が届けられます。地域の中で、次の世代も野菜をつくってみたいと思えるようにと考えました。豆腐のおからで堆肥もつくります。低農薬で、豆が育てた野菜です。これは体にも健康にもいい野菜です。

### ○なぜ、こうしたことをやっているか○

今から20年近く昔に地元の米の食味値(注)が70~80という数字だということがわかりました。魚沼米は75以上ですが、ここの米もすごいと思いました。小さい時から普通に食べていたのですが、普段見過ごしている中に資源があるということを思いました。



### 「せいわの里・まめや」とは

何もないと思っていた田舎に、実は豊かな恵みがあることに気が付き、価値が何なのかを見極めること。地元でとれる産物を使い、地元の料理として、自分達が慣れ親しんだ料理で地元の人が中心となり振る舞っている。

若い人にも農業に興味を持ってもらうには事業として成功することが大切。その活動拠点として施設をつくり、ふるさとの景観や受け継がれてきたものづくりの知恵の大切を守り活用することで、農村文化を子どもたちへ引き継ぐ取り組みを実践されている。

おいしいご飯にはおいしい味噌汁と漬け物です。特産品をつくりたくて、味噌と漬け物のボランティアグループをつくり、イベントで、味噌だんご、味噌おでんをつくり、漬け物はぜんざいや味噌飯と販売しましたが、それだけではあまり魅力がない、自然消滅すると感じました。「どこで食べられますか。」と聞かれますが、イベントのときだけの販売で、届ける手段がないのが問題でした。多気町丹生大師の里周辺では、あじさいが一万本咲きます。たくさんの観光客がいらっしゃいますが、座るところもお茶を飲むところもありませんでした。もやもやしたものが、私の頭の中でぐるぐるまわっていたのですが、何かの拍子にひとつの輪に入りました。つくるところ、売るところひとつにすればいいと。でも簡単にはできないと思いました。

○資源を生かす、主体をつくる○

メンバーが高齢化し、グループは自然消滅しそうになりました。山の中の農村の資源は、おいしい米、旬の野菜、山菜などです。自給自足の生活で積み上げた知恵がここにはあります。おいしくするための知恵、保存の技など、これも資源です。かろうじてお年寄りが持っているものを、なんとかお年寄りが元気なうちに伝えたいと思いました。仲間をつくり手をつないで一緒に乗り越えようと考え、出資する真剣なメンバーを集め、農業法人「せいわの里」をつくりました。目的は農村文化を継承する後継者を育成すること。一口5万円で30代から80代の35人が集まって、210口で1050万円が集まりました。



気さくに語られる 北川さん ↑

○「まめや」をつくる○

活動拠点をつくるには、1000万円では無理です。県の補助金をもらおうということになり、申請書類を全部つくると言ってしまったのですが、これがえらいこと(笑)でした。出してはダメと言われることを繰り返し1年目は断念しました。2年目の挑戦では、書類をつくって夜が明けたこともあります。1ヶ月の貸借・損益を5年分出しました。初めは赤字でも、5年目にはあれこれこれして黒字にもっていく絵を描けと言われてました。数字との戦いでした。最終的には補助金をいただいたきましが、250万円カットされました。こんなところ、人が来ないと言われて。どれだけ書類つくって、こうすると言っても、当然ですね。店に座るスペース半分の資金がなくなりました。レストランを開店するのに食器も買えない状況でした。



直売所一庭先で作った少量多品目の野菜 ↑

○お金がなくてよかった○

家にいっぱい食器はあります。蔵の木の箱の中に、使わない重箱もあります。重箱に料理を盛ろうと考え、ごっつおうを入れるという意識で使いました。急須やまな板もみんなで持ち寄りました。座布団は、おばあさんたちが嫁入りで持ってきた着物で作り、おじいさんたちも楊枝たて、割り箸たて、メニュー立てなどを作ってくれました。フライヤーは、豆腐づくりを教えてもらった豆腐屋にいただきました。ないものはみんな自分たちで準備してオープンしました。

お金があったら、食器もそろえたいし、おばあさんに座布団を縫ってもらわなくてもよかった。でも、お金がなかったから絆ができました。目的があって、それに向かう中でそれまでに谷あり、山あり、迷い道あり、ぐるぐる迷ってやっとたどり

つきました。それがよかったと思います。一番弱点は数字、経営は素人ですから。やっとオープンにたどり着いたころ、私らの数字の力、経営の力が強まっていたのだと思います。最終的に思ったのは、目的を達成するために、時間も、出会った人たちもすべて必要だったということです。だから今、できると思いました。



○田植え休みがある○

今、20代から80代までの35人が働いています。土日休みです。自分の仕事があって、その上で働いて、地域のこともやっています。始めたときは時給500円でした。半年くらい経って、100円上げようと言ったら、みんなが「あげやんでいい」「はよ借金返そうと」言ってくれました。とにかく軌道に乗せるためにがむしゃらに働きました。ここで面白いのは、農繁期休業があることです。4月25日、農業用水に水が入り、田越こしが始まります。まめやは4月の連休の間は休み、5月1日には営業を開始します。

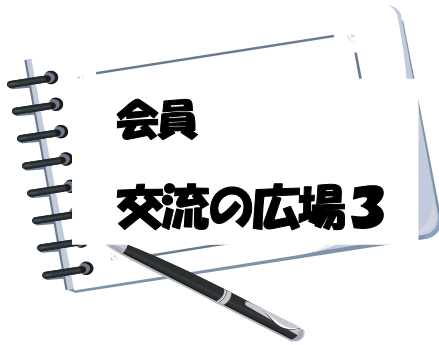
野菜を持って来てくれるおばあさん達が、料理のお師匠さんです。届けられた野菜を見て、メニューを考えます。60cmのほうれん草は茎が小指ほどありますが、きんぴらにします。

この地域、地元の文化、この里が肯定され、料理だけでなく歴史も文化もあることに気づかされ、この里が元気になりました。遠くから来てくださる方々のおかげです。ありがたいと思っています。地域の子供達やお年寄りが、つくしやわらびを採って持って来てくれますが、そういう絆を大事にしていきたいと思っています。

参加者より

「いま見られない家庭料理、お話を聞いたらますます、料理の味が心にしみました。今日、初めてきて感激しました。」

(注)食味値・・・お米のおいしさを表します。お米の中に含まれる4つの成分(水分・タンパク質・アミロース・脂肪酸過度)を分析し、100点満点で評価し、数値が高いほどおいしいお米となります。



**尖閣諸島の領土問題を野鳥の会の視点から見て**

浅沼 秀夫(尾張野鳥の会会長)

日中間には野鳥についての覚書が交わされている。基本的には人間も野鳥も、地球上にすむ生物は同じ権利を持つものと思っている。

人間だけが特別の権利を有するものだろうか。すべての生物のおかげで人間も、生かして頂いている。

私は地球を汚してきた人間の悪業から、野鳥を守れ!野鳥たちを支える生物を守れ!その環境を守れ!と言いたい。東シナ海に浮かぶ人も住んでいない尖閣諸島。なぜ俺のものだ俺のものだと争わなければならないのか。なぜ尖閣諸島を困む生態系を仲良く共有できないものだろうか。それは、日中両国ともに海域や海底資源の利益に繋がる利権がらみの争奪戦だからだと思う。

ブラジルでの第一回の「持続可能な開発国際サミット」では人類生存のためのこれ以上の地球環境への負荷の制限を高らかに宣言をした。持続可能な社会云々(批准)を言うのであれば尖閣諸島問題でいがみ合うのはおかしい。

この問題を地球規模の人類生存と地球規模の環境保全の尖兵の位置に据え、人間第一主義を謙虚に反省すべきではないのか。「顔と顔 Face to Face」かつてのピンポン外交の記憶が蘇る。この考えを日中両国民は共有できないか。二度と戦争なんかまっぴらだ。

今、核ミサイルの発射ボタンを押したら世界はどうなるか。福島原発事故の比ではない。この道を進んでいるような気がしてならない。(81歳)

**東海のみなさんと一緒に活動して**

橋本 直行(コープみえ)

「2013年春 少年少女ヒロシマの旅」(3月27日~29日)に、コープあいち、コープぎふ、コープみえの小学4年生から6年生の子どもたち20名と一緒にヒロシマを訪れました。初めて顔を合わせる子どもたち、きっと当日の朝まで不安と心配でいっぱいだったと思います。それ以上に、保護者のみなさんの心配は大きかったと思いますが、毎年この旅から帰ってきた子どもの成長を喜ばれる声をいただきますと、あらためてこの旅の良さを感じます。

多くの子どもたちは、初めて被爆者のお話を聞いたり、資料館やフィールドワークを通して原爆の悲惨さを知ります。感想文の多くは、「原爆をなくしたい。」「原爆は絶対に使ってはいけない。」「戦争はしてはいけない。」と書かれます。そして平和の尊さと命の大切さを知り、友情を育てています。

2年前に参加した子どもたち(愛知、三重)が、今でも仲良く遊んだりしていると聞きました。子どもたち、ちゃんとつながっているんだと嬉しかったです。

つながりと言えば、もうすぐ「2013年原水爆禁止国民平和大行進」が始まります。東京を出発して愛知県に入ってくるのは5月31日、岐阜県は6月11日から始まります。三重県は和歌山から広島へ向かうコースですので、6月8日~18日の日程で県内を歩きます。お近くを歩くとき、みんなで一緒に歩きませんか。広島(8月4日到着)にむけて、みんなで平和への想いをつないでいきましょう。

最後になりましたが、研究センターの環境パネルでは、東海コープグループの3生協合同の取り組みを開催しています。今年度は岐阜県で環境フィールドワーク(7月28日・自然観察教育林の体験企画)の開催を相談しています。ぜひ楽しみにしててください。

\*「少年少女ヒロシマの旅」は、今年で13回目となり、延べ372名の子どもたちが参加しました。今年、子どもたちに「何でカタカナで“ヒロシマ”って書くと思う」と質問しました。みんなガイドさんに聞いたりして、帰りには全員自信満々の顔で答えてくれました。

INDEX			
巻頭エッセイ 救貧法とニュー・ラナーク	朝倉美江		1
第9回東海交流フォーラムを開催しました!			2
「近藤園芸」見学調査会 食と農パネル			3
私のくらしの中の生協商品3			4-5
「せいわの里・まめや」取り組みに学ぶ			6-7
会員交流の広場 3			8

研究センターNEWS 106号 4ページ6行目の「ソフトボール樹庵杯」は「バレーボール樹庵杯」の誤りでした。お詫びして訂正致します。

2013年4月25日(偶数月25日発行)  
 定価200円  
 (税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)  
 発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター  
 代表理事 川崎 直 巳  
 〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39  
 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315  
 E-mail AEL03416@nifty.com  
 HP http://www.tiiki-kyodo.net/